

無業者・ニート対策の基本的提言

工藤 定次

子育てにせよ、教育にせよ、社会的教育経験にせよ、その目的は『いかに自立させるのか』である。にもかかわらず自立し得ていない若年者層が多数存在している現実的事実がある。

近年、この若年者層に対して（大人になりきれていない『若い大人』）様々な対策がなされようとしている。その対策が有効かつ、成果が現実のものとなるためには、基本的な事柄に対し、認識の共有化が前提となる。

共有化の重要な課題を絞り込むとすれば

- ①『参加』を経由した『自立』への道筋の確立
 - ②『参加』への意欲と認識の低いニートをいかに『場』へと誘導するのか。その道筋の確立
- 以上の二点となる。更にもう一点加えるとすれば
- ③『自立』に至る長期的時間をいかに確保し得るか
- である。

これらの点に関して、若干の考察をしてみる。『参加』を経由する、ということの意味と意義である。『自立』とは、究極的には就労へ至る成長過程である。しかし、『参加』は、社会で生きるための必要かつ、最低限の力をつけるための過程である。例えば、他者との意志の疎通能力であるとか、集団の中での自己の位置確認、役割の認識形成であったり、時には、識字能力などである。また、その中には、生きることの意味、働くことの意味といった抽象的概念の育成も含まれよう。

通常であれば成長過程の中で育まれるものが、何らかの要因によって“中断”されてしまったのである（私はこれを社会性または社会的経験の“穴”と称している。以下“穴”と称す）。この中断による“穴”が存在し、しかもその“穴”の大きさが大きく、深さが深いのがニートである。

それ故、まず第一に“穴”を埋めるために『参加』が必要なのだ。この『参加』の時間が確保されない限り『自立』すなわち、就労的訓練は意味

のあるものには決してなり得ない。

だが、ここで更なる課題が生じる。ニートをいかに発見し『参加の場』へ誘導するか、である。発見は、公的私的を問わぬ相談機関や、民生委員、保護司の方々の力を有機的に結合することによって克服されよう。次に誘導はいったい誰がするのか、である。私見ではあるが、誘導はニートの年齢又は、年齢に近い特別な訓練がなされた若年者が適当である。なぜならば“感性”が近いからである（横浜等のヤングジョブ・スポットのアテンダントシステム、精神分野におけるジョブコーチシステムが参考となろう）。

又、『参加の場』は、居場所（たまり場）やボランティア、サークルなど、様々なものが用意されるべきである。

もう一点重要なことは『参加の場』のみに安住させることなく、次のステップ、すなわち『自立』への誘導である。個々人の“穴”によって多少は異なるであろうが、一定期間が過ぎれば『自立』すなわち、就労訓練の場へ誘導されなければならない。

結論的に述べれば、ニートと称される若年者層は、社会性及び社会的経験の不足の“穴”が大きく、深いゆえに、『参加』という時間が確保され『自立』的場での時間と経験が必要不可欠である、ということである。

更にこの時間を確保するためには、誘導者の育成や場の確保と共に経済的裏づけが必要となる。それには、

『就労育英基金』（仮称）

なる“貸し付け”制度を提唱したい。自己の成長を一定程度自己責任とし、就労後返済をするということによって育成の循環型社会を作ることができ得るからである。

（くどう・さだつぐ NPO 法人青少年自立援助センター理事長）